

事象構造と完結性

岸本秀樹
神戸大学

1. はじめに

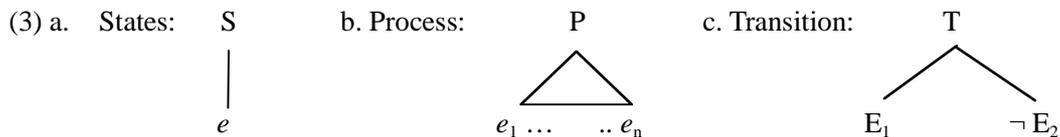
動詞の事象構造

Vendler (1967)による動詞の分類--動詞の語彙的なアスペクト

- (1) a. 状態動詞(stative verb)
- b. 活動動詞(activity verb)
- c. 到達動詞(achievement verb)
- d. 達成動詞(accomplishment verb)

- (2) a. ここにジョンがいる。
- b. ジョンが走った。
- c. ジョンが駅に着いた。
- d. ジョンが日記を書いた。

Pustejovsky (1991)の Event Structure の表示 (cf. Pustejovsky 1995)



影山(1996, 1997)による(代表的な)語彙概念表示

- (4) a. 状態動詞: [y BE AT-z]
- b. 活動動詞: [x ACT (ON y)]
- c. 到達動詞: [y BECOME [y BE AT-z]]
- d. 達成動詞: [x ACT (ON y)] CAUSE [(y) BECOME [y BE AT-z]]

ただし移動動詞は [x MOVE] (あるいは[x ACT] & [x MOVE])
移動推進動作は, [x ACT] CAUSE [y MOVE]

どのような語彙概念表示が必要か?--さまざまな可能性があるが,ここでは,完了/未完了の事態についての表示の可能性について日本語を中心に考察する。

英語においては,かなり生産的に活動動詞を達成動詞に変えることができる(cf. Dowty 1979)。

- (5) a. John ran for one hour/*in one hour.
 b. John ran to the station in one hour/*for one hour.
- (6) a. John pounded the metal for one hour/*in one hour.
 b. John pounded the metal flat in one hour/*for one hour.

しかし、日本語では以下の例が示すように、活動動詞をこのような変換は少なくとも統語的な方法ではできないように思われる。

- (7) a. ジョンは、走った。
 b. ??ジョンは、駅に走った。
- (8) a. ジョンは、金属をハンマーで叩いた。
 b. ??ジョンは、金属をハンマーで平らに叩いた。

このような、活動動詞から達成動詞の変換ができないという日本語の特徴から、達成動詞の概念構造にもう一つのサブタイプ（部分的な達成を表す語彙概念構造）を認めてもよいのではないか。

2. 移動動詞

日本語の移動様態動詞（自動詞）：歩く、走る、飛ぶ、滑空する、滑る、駆ける、
 漂流する、漂う、転がる、這う、など
 移動推進動詞（他動詞）：（車を）運転する、操縦する、押す、引きずる、
 引っ張る、など

- (9) a. ??ジョンは、駅に歩いた。 (cf. Yoneyama 1986)
 b. ??メアリーはカートレジの中に押した。
- (10) a. ジョンは駅に歩いて行った。
 b. メアリーはカートレジの列の中に押し込んだ。
- (11) a. ジョンは駅まで歩いた。
 b. ジョンはカートレジまで押した。

移動様態動詞と（移動にコントロールを加え続けるタイプの）移動推進動詞は、「に」による着点表現を与えることができない。英語では問題ない。

- (12) a. John walked to the station.
 b. Mary pushed the cart to the cashier.

着点表現が可能タイプの動詞（着点の含意がもともとある）

- (13) a. ジョンが東京に着いた。
 b. メアリーは、駅に(歩いて)行った。

二種類の動詞の違いはどこから来るのか？ → 活動動詞と達成/到達動詞の違い

- (15) a. ジョンは、{一時間/??一時間で}走った。
b. メアリーは、カートを{一時間/?*一時間で}押した。

ただし、経路表現をつければ OK、しかし、これは、着点ではなく、行為の及ぶ範囲を指定しているので、達成動詞とは異なる振る舞いをする。

- (16) a. ジョンは、駅まで{一時間で/一時間}走った。
b. ジョンは、郵便局まで{一時間で/一時間}そのカートを押した。

「に」で表される着点表現を付加することによって、移動様態動詞を達成動詞に変えることができない。

- (17) [x MOVE] --/-->
[x MOVE] CAUSE [BECOME [y BE AT-z]]

移動様態動詞の時間副詞の振る舞いは、概念構造中に出来事を区切る(delimit する)[UP TO-z]のような修飾要素(形態的には「z まで」として表示される)がつくかどうかで決定される。

- (18) a. [x MOVE]
 ← 一時間 (non-delimited)
b. [x MOVE[UP TO-z]]
 ← 一時間で (delimited)

これに対して、液体などの(材料)の移動に関しては、移動様態や移動推進タイプのもので、「に」の表出が可能である。

- (19) a. ジョンはポットにお湯を注いだ。
b. 汚水を川に(*川から)流す。
 (cf. お雛さまを川に(川から)流す[着点でない])
c. セメントを隙間にできた穴に流す/流し込む。
d. ニュースを会員に流す/アナウンスする。
e. タンクに水を注入(注水)する。
f. 糸を糸巻きに(すこしずつ/ぐるぐるに)巻く。(部分的/全体的)

英語では、pour のような動詞は、外から中への移動の含意があるので onto/into を使う。ただ、これが着点であることには変わりがない。

- (20) John poured water into the pot.

この手の動詞は、「に」が表出されるが、活動動詞のように振る舞う。

- (21) a. セメントを{一時間/?*一時間で}隙間にできた穴に流した。

b. {三分間/?*三分間で}タンクに水を注水した。

部分的な移動の達成が可能なものに対しては、着点表現が可能である。ただし、時間副詞の分布から、着点がついても、完結する事態を示しているわけではない。

---> 部分的な達成を示す概念構造が必要

BECOME は、完結性を示す演算子なので、部分的な達成を表すことができない。

(22) BECOME の定義：「 p がある時点 t で真でありかつその直前の時点 $t-1$ において偽であるときに、 $BECOME\ p$ が真になる」(Dowty 1979)

(23) $BECOME_{part}$ の定義：「 p' p である p' がある時点 t で真でありかつその直前の時点 $t-1$ において偽である場合に、 $BECOME_{part}\ p$ が真になる」岸本(2007)

部分性の指定は、未完了(imperfective)や部分格(partitive case)の表示を持つ名詞句の関与する場合の解釈に必要となる。Borer (2005) Krifka (1998)など。取り扱いは基本的に grammatical aspect の扱い。しかしここでは、lexical aspect として指定する取り扱いになる。

(24) 注ぐ：[[x ACT] CAUSE [y MOVE]] CAUSE [$BECOME_{part}$ [y BE AT-z]]

「注ぐ」は基本的に材料の部分的な移動を表す。着点には到着しているが、それだけでは、材料全部の移動の含意はない。移動が部分的であることが $y\ BECOME_{part}$ によって指定される。部分的な達成なので、完結的な事象と共起する「1時間で」は用いられない。

(25) a. [[x ACT] CAUSE [y MOVE]] CAUSE [$BECOME$ [y BE AT-z]]]

↙
√三分間で

b. [[x ACT] CAUSE [y MOVE]] CAUSE [$BECOME_{part}$ [y BE AT-z]]]

↙
*三分間で

「注ぐ」の場合「まで」を使用することができるが、この場合、移動の範囲ではなく、達成の度合いを指すことになる。

(26) a. メアリーは、水をポットに八分目まで注いだ。

b. メアリーは、{三分間で/?*三分間で}水をポットに八分目まで注いだ。

delimit されると基本的に達成動詞と同じ

(27) [[x ACT] CAUSE [y MOVE]] CAUSE [$BECOME_{part}$ [y BE AT-z [UP TO-z']]] (z' z)]

↙
三分間で

移動動詞には活動と達成の中間タイプの概念構造が必要

- (28) a. [x MOVE] (活動動詞)
b. [x MOVE] CAUSE [BECOME [y BE AT-z]] (達成動詞)
c. [x MOVE] CAUSE [BECOME_{part} [y BE AT-z]] (部分達成動詞)

なお、「走る」「歩く」のような動詞の主語は、部分の到着の意味はないので、y で部分性が指定される(29b)のような概念構造は持たない。

- (29)a. [UP TO-z] → z-まで
b. [BECOME/BECOME_{part} [... BE AT-z]] → z-に

動詞によっては、(28b)と(28c)の両方の意味を持つことができる。(岸本 2007 参照)

- (30) a. 壁にペンキを{一時間/一時間で}塗る。
b. 壁にペンキを{一時間/*一時間で}塗りたくる。

- (31) a. 壁にペンキを二層に塗る。
b. ?*壁にペンキを二層に塗りたくる。

中国語の場合、

(A) Goal 項が目的語の位置に生起している場合

- a. ??張三走了車[立占]. (??張三は駅に歩いた。)
b. ??張三把購物車推了門口. (??張三は買い物カートを入りに押しした。)
c. 張三去了車[立占]. (張三は駅に行った。)
d. ??張三把熱水倒了暖壺里 (張三はポットにお湯を注いだ。)

(B) Goal 項が「往(に向かって)」で示されている場合

- a. 張三往車[立占]走. (張三は駅に向かって歩く。)
b. 張三把購物車往門口推. (張三は買い物カートを入りに向かって押す。)
c. 張三往車[立占]去了. (張三は駅へ行った。)
d. 張三把熱水往暖壺里倒. (張三はポットへお湯を注いだ。)

(C) Goal 項が結果補語で示されている場合

- a. 張三走到了車[立占]. (張三は駅まで歩いてついた。)
b. 張三把購物車推到了門口. (張三は買い物カートを入りにまで押しした。)
c. *張三去到了車[立占]. (張三は駅まで行った。)
d. 張三把熱水倒進了暖壺里. (張三はポットへお湯を注いだ。)

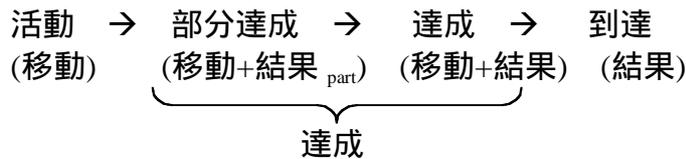
「倒(注ぐ)」は、「走(歩く)」「推(押す)」と同じパターンを示す。
→未完結の事態を表し、Goal を目的語の位置に生起できない。

- 可能性は二つ 1. 「倒」は活動動詞の事象構造しか持たない。
2. 「倒」は部分達成の構造を持っているが、Goal が目的語として生起するために、measure out の条件に反する。

(E) Goal 付加の可能性

	活動	部分達成	達成/到達	
英語	√	√	√	(ただし, 活動→達成)
日本語	*	√	√	
中国語	*	(?)	√	

(F) 事象認知の可能性



3. 状態変化動詞

第 2 節で考察した BECOME_{part} の関与する語彙概念構造が存在するのではないか。そうすると、やはり、状態変化動詞にも同じようなものが存在するのではないか。

- (32) a. ジョンは、壁を叩いた。
b. ジョンは、壁を壊した。

- (33) a. 活動動詞 (例えば「叩く」) の概念構造:
[x ACT ON y]
b. 状態変化動詞 (例えば「壊す」) の達成の概念構造:
[x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE AT-BROKEN]]

活動動詞には結果述語は付かない。

- (34) a. *ジョンは、壁を粉々に叩いた。
b. ジョンは、壁を粉々に壊した。

時間副詞の振る舞い

- (35) a. ジョンは{一時間/*一時間で}壁を叩いた。
b. ジョンは{一時間で/?*一時間}壁を壊した。

したがって、活動動詞→達成動詞の変換は日本語では統語的にはできない。

BECOME が関与する概念構造を持つ達成動詞は、完全な変化を表すことになるが、部分的な達成 (部分的な変化) を表す状態変化動詞が結構あるのではないか。部分的変化・全体的変化に関してはあいまいな場合が多いが、部分的な変化を表す動詞も結構ある。

- (28) a. ジョンは寝たばこで畳を焦がした。(基本的に部分的)

- b. ジョンは寝たばこで畳を焼いた。 (全体的/部分的)
- (29) a. セーターが虫に食われてしまった。 (イディオム・部分的)
b. お弁当が羊に食べられてしまった。(全体的)
- (30) a. お菓子をつまみ食いする。
b. お菓子を食べる。
- (31) a. メアリーの歯が一本欠けた。 (部分的)
b. メアリーの歯が一本砕けた。 (全体的)

部分達成動詞はどのような振る舞いをするか?

- (32) a. 子供はお菓子を{一時間/一時間で}食べた。
b. 子供はお菓子を{一時間/?*一時間で}つまみ食いした。
- (33) a. [x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE AT-EATEN]]
b. [x ACT ON y] CAUSE [BECOME_{part.} [y BE AT-EATEN]]
-

- (34) a. 子供はお菓子を全部つまみ食いした。 (残りの部分がある)
b. 子供はお菓子を全部食べた。 (残った部分はない)
- (35) a. メアリーの歯が全部砕けた。
b. メアリーの歯が全部欠けた。
- (36) a. メアリーの歯が粉々に砕けた。
b. *メアリーの歯が粉々に欠けた。
- (37) a. ジョンは、ドアを叩いたが、ドアはなんともなかった。
b. [x ACT ON y]
- (38) a. #ジョンの歯は欠けたが、歯は何ともなかった。
b. #ジョンの歯は砕けたが、歯は何ともなかった。

4. 結論

現実世界で起こることは、全体的な変化よりも部分的な変化の方が多い。動詞は、この二つの用法があいまいなものが多い。部分的な変化は、文法的なマーカーを使って表すことも多いが、それだけで部分的な変化を表す動詞もある。Borer (2005), Krifka(1998)などでは、grammatical aspect の部分性が議論されているが、lexical aspect においても部分性の指定がある語彙概念構造があってもよい。

Appendix 1

移動動詞でも全体的な移動と部分的な移動の違いが出るものがある。

- (1) a. 子供はコップの水を口に含んだ (部分的/全体的)
b. 子供はコップの水を飲み干した (全体的)
- (2) a. 醤油を料理に垂らす。(部分的/全体的?)
b. 醤油を料理に入れる。
- (3) a. タンクから水が漏れていた。(部分的)
b. タンクから水が抜けていた。(全体的)

Appendix 2

- (1) a. ジョンは、先生の部屋に行った。
b. ジョンは、部屋に荷物を運んだ。
- (2) a. ジョンはコンピュータを持ち運んだ。
b. ?*ジョンはコンピュータを自分の部屋に持ち運んだ。
- (3) a. ジョンは、{一時間で/*一時間}部屋にその荷物を運んだ。
b. ジョンは、{一時間で/一時間}その荷物を運んだ。
b. ジョンは、{一時間で/*一時間}東京に行った。

「転がす」にはふたつのタイプがある?

- (4) a. ジョンは、坂の下にボールを転がした。
b. ?*ジョンは坂の上にボールを転がした。
- (5) a. ジョンは、坂の下までボールを転がした。
b. ジョンは、坂の上までボールを転がした。

達成動詞での時間副詞の振る舞い。

- (6) a. メアリーが日記を{一時間で/一時間}書いた。
b. メアリーが日記を{一時間で/*一時間}書き上げた。

「書く」は達成動詞と活動動詞の意味であいまい?

(活動だけをやって結果がない) 活動動詞として扱ってよいか?

(McClure (1995)参照).

参考文献

- Borer, Hagit (2005). *Structuring Sense Volume II: The Normal Course of Events*. Oxford: Oxford University Press.
- Dowty, David (1979). *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht: Reidel.

- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』くろしお出版.
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と語彙概念構造』研究社.
- 岸本秀樹 (2007) 「場所格交替動詞と語彙概念構造」『日本語学』7: 88-108.
- Kiparsky, Paul (1998). "Partitive case and aspect." In William Greuder and Miriam Butt (eds.) *The Projection of Arguments*, pp. 265-307/ Standfrod: CSLI.
- Krifka, Manfred (1998). "The origin of telicity." In Susan Rothstein (ed.) *Events and Grammar*, pp. 197-235. Kluwer: Dordrecht.
- Li, Yafei (1993). "Structural head and aspectuality." *Language* 69: 480-504.
- McClure, William (1995). *Syntax and Syntactic Projections of the Semantics of Aspect*. Tokyo: Hituzi.
- Pustejovsky, James (1995). *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Tenny, Carol (1994). *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*. Dordrecht: Kluwer.
- Tsujimura, Natsuko (1991). "On the semantic properties of unaccusativity." *Journal of Japanese Linguistics* 13: 91-116.
- Yoneyama, Mitsuaki (1986). "Motion verbs in conceptual semantics." *Bulletin of the Faculty of Humanities, Seikei University* 22: 1-15.
- Vendler, Zeno (1967). *Linguistics and Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.
- Washio, Ryuichi (1997). "Resultatives, compositionality, and language variation." *Journal of East Asian Linguistics* 6: 1-49.